

「ボイスサンプル」を応用した日本語音声指導の研究
 RESEARCH ON THE EFFECT OF “VOICE SAMPLE” FOR FLUENT
 PRONUNCIATION

王伸子, 専修大学
 Nobuko Wang, Senshu University

大塚明子, 専修大学大学院
 Meiko Otsuka, Senshu University

1. はじめに

日本語教育における音声指導は、学習者のコミュニケーション能力を向上させる上で、発話においても聞き取りにおいても、重要なことだと認識されている。従来、音声にかかわる教室活動としては、単なる短い文を聞いて書き取るディクテーションから、まとまった量の内容を聞いて、文章を再生するように書き起こすディクトグロス、また、本来は同時通訳の訓練として、聞くことと話すことを同時におこなえることを目的とするシャドーイングを外国語学習にも取り入れ、発話を滑らかにする練習も行われている。これらの練習がありながらも、適切なイントネーションやポーズを習得する練習は、文法や漢字の学習より後回しにされることが多く、そうした練習の実行を困難に感じる教師も多いというのが現実であると思われる。

現在は、CLILのような、コンテンツの教授が重要であり、外国語教師が母語話者であるか否かを問わないどころか、むしろ、学習者の母語の話者である教師が担当するという方針の教授法も出てきているが(王(2016b))、学習者の多くはやはり、母語話者のような発音と言語スキルを手に入れたいと希望していると思ってよいであろう。

そこで、本研究は、学習者自身が音声表現能力の向上に取り組める活動として、プロのナレーターや声優が、その活動広報のために作成する「ボイスサンプル」を教材として取り入れることを提案するものである。さらに、「ボイスサンプル」を教材化したものを学習指導に取り入れてみたいという教師に、自分自身の声を客観的に観察しながら音声指導をいっしょに考えようというワークショップの形を取り入れた教師研修を行うことも視野に入れ、研究を進めるものである。

「ボイスサンプル」を実際に作成してから5年間、日本語教育への応用と教材化を計画し、平成29年度より3年間、学術振興会の科学研究費の基盤研究

(C)に研究課題「「ボイスサンプル」を応用した日本語音声指導の研究と開発」として採択され、現在、研究を進めている。

2. 問題の所在

2-1. 問題点

日本語教育における音声指導には、問題点が二つあると考えられる。

第一の問題点は、多くの日本語教師が音声指導はむずかしいと感じているということである。日本語母語話者教師も、日母語話者教師も、学習者の発音を適切に指導し効果を上げるのは困難であると感じていることが多いようである。した

がって、これを支援する新しい指導法には何が必要かを明らかにし、具体的な指導法を提案したいと考えている。

第二の問題点は、日本語教育の授業のなかで音声を指導すること自体が、最優先とはされにくいということである。日本語能力試験や大学の外国人留学生入学試験では、イントネーションやポーズといった音声表現が評価の対象となることが少なく、したがって音声表現を育てる練習などは授業の中では後回しにされることが多くなる。

以上のような二つの点から、日本語教育における音声指導には、つねに、指導しにくいと言われる原因が考えられるのである。

2-2. 問題の具体的側面

では、具体的にどのような側面があるのか考えてみると、以下のような音声的問題点が挙げできる。

- ・特殊拍についての問題点（促音、撥音、引く音）
- ・アクセント
- ・イントネーション
- ・適切なポーズの挿入
- ・発話速度
- ・驚き、感嘆、落胆等の感情を含む発話 等々

さらに、パラ言語を含む具体的な発話の様相なども、指導をするのが難しいとされるうえに、どのように評価をするかということも、教師にとって困難を感じる理由になっていると思われる。

そこで、こうした今までの音声指導や練習方法の特徴と問題点を探りながら、日本語学習者にとってコミュニケーション上で必要な音声特徴を、パラ言語的特徴も含めて整理し、さらに、声を職業とするナレーター等が作成する「ボイスサンプル」の音声特徴を分析し、新しい指導法の可能性について明らかにすることを一つの目標として研究を進めている。

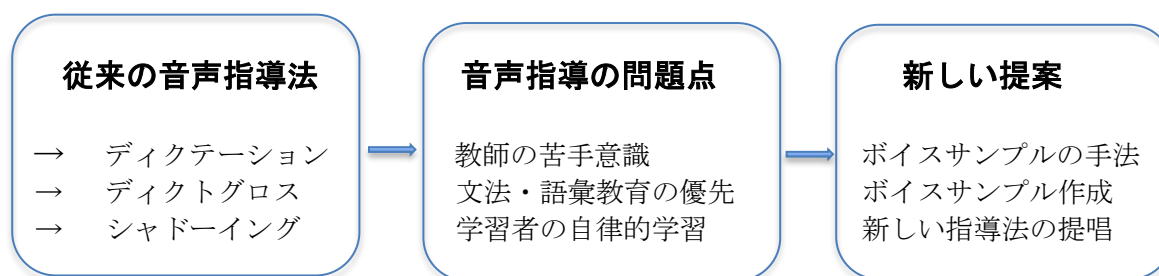


図1 従来の音声指導法から新しい提案へ

3. ボイスサンプルとは

3-1. 名刺代わりのボイスサンプル

ボイスサンプルは、「声」を仕事としているナレーターや声優、アナウンサーなどが自分の声や読み方をアピールするための音声データである。現在では、自

分のHPに貼り付けて公開することも増え、さらに、CDやUSBに落として営業やオーディションに持参することも一般的だということである。本稿では、そうした声の仕事のうち、ナレーターのアナウンスに焦点をあて、説明する。ナレーターの場合、技術とともに個性が重要視される仕事でもあるためボイスサンプルも内容は非常に多彩である。ほとんどの場合、1本2～3分程度の音声のみ、もしくはBGM付きで、4、5パタンの音声が入っているものを作成する。内容は、バラエティ番組への進出を狙ったナレーターならハイテンションの愉快なものを集める、あるいは、硬派なドキュメントを希望するナレーターならシリアスな雰囲気絞ってみるなど、コンセプトを決めて作る。最近では、東京オリンピックを睨んでスポーツドキュメンタリーものを扱ったものが多くみられる。ボイスサンプルのもうひとつの目的として、「自分を知る」ということがあげられる。自分の読みの特徴や個性を知り表現の幅を広げることを目指す。そのような場合には1つのボイスサンプルにバラエティやCM、ドキュメントなど、さまざまなジャンルのアナウンスを収録することもある。

では、実際にボイスサンプルはどのように作るのだろうか。自宅に機材があれば、宅録といって自分で制作することがあるが、たいていは録音スタジオで作る。収録前に、まずサンプルのコンセプトを決め、次に、原稿を選ぶ。事務所に所属していたりアナウンススクールなどに通っていたりする場合は、何本か原稿を提案してもらい、その中から自分の力に見合うもの、収録したいものを選ぶことがある。

3-2. ボイスサンプル原稿の作成手順

自分で収録を希望するアナウンスがある場合には、その番組を録画して、再生しながら原稿を自分で書き起こすという作業をおこなう。時間はかかるが、この作業によって、読み方や文章の特徴、読んでいるナレーターの個性などを掴むことができる。この作業のために番組30本分のアナウンス原稿を起こすというナレーターも少なくない。書き起こした原稿をアレンジして自分が表現しやすいようにすることも可能である。

また、原稿をゼロから自分で書きおろす場合もある。番組や映像を想像しながら数十秒間で人を引き込む原稿を作るのは簡単ではないが、喋りや声だけでなく、原稿そのものが面白く興味深いものであれば、より印象に残るボイスサンプルになる。自分なりのセンスがより発揮しやすくなるし、文章作成のトレーニングにもなる。

3-3. ボイスサンプルの録音とその後の作業

使う原稿が決まったら、読みの練習を行う。間違わずに読めるようになることはもちろん、滑舌やスピード、間の取り方、声の高低大小、イントネーション、アクセント、息の使い方などだけでなく、楽しげに、意地悪く、悲しげに、格好よく、など、目指す表現を完成させるため工夫をしながら何十回も練習をする。このときに、ただ読むだけでなく、録音して、それを聞き、自分の読み方を客観的に把握することも大切である。番組から書き起こした原稿なら、実際に番組の

ナレーターを読み方をコピー、つまり、そっくりそのまま再生するように真似ることもある。間の取り方、息継ぎなど、細部まで完璧なコピーを目指すと、自分の現在のスキルを超えた表現力を身につける恰好の練習になる。人に聞いてもらい、間違いや聞きにくい部分などの指摘を受けることも有効である。自分では楽しい雰囲気を出しているつもりでも、人が聞くと表現が小さく十分にそれが伝わっていないことがあるなど、さまざまな気づきを得ることができる。

また第三者のナレーションを聞いて、喋り方の癖や間違いを指摘することも自分の勉強になる。ナレーションスクールでは、こうした「人の読みを聞く」こともトレーニングの一つとしている。自分の読み方の癖やアクセントやイントネーションの間違いなどは読んでいるだけでは気づきにくいのが、人の読み方の間違いに気づくことで、自分の読み方の欠点を自覚できることができるからである。

以上を経て、録音スタジオでディレクターの指示の下で収録して完成させる。完成したものをなるべく多くの人に聞いてもらい、意見や感想を聞くことはプロのナレーターも通常行っている作業である。

4. なぜ、「ナレーション」なのか

4-1. アニメの声優との違い

「声」のプロフェッショナルに着目した語学教育はいくつかあり、日本語教育では近年は、サブカルチャーのアニメやそれに伴うコスプレのファンが全世界に広がっていることから、アニメの「声優」が注目されることが多い。中国などでは、大学でもアフレコ大会、アフレコ・コンテストなどが実施され、教育機関でも、学習者個人でも声優の音声を手本とすることが多いということはよく知られている。アニメから日本語を独学したという潜在的な日本語学習者も、また多い。しかし、本研究では声優ではなく、ナレーターに着目する教材を提案したい。その理由を列挙すると以下のようなになる。

アニメの言語の特徴として、

- ① アニメに用いられる状況はほとんどが会話場面である。
- ② スラング、つまり、ある集団でのみ通用する隠語、略語、俗語が多い。
- ③ 役柄を反映した「キャラクターボイス」が用いられている。

以上のような状況の音声を教材とした場合、あるいは、個人的な学習の手本とした場合、アニメのような声で、

「マジ？あたし、めっちゃ、うれし〜！」

という談話内の表現を、

「本当ですか？とてもうれしいです」

という表現として学習、使用するということが頻繁に見られる。

アニメのようなキャラクターボイスなかなか抜けなくて困る、という現場の声も聞こえる。

4-2. ナレーションについて

一方、ナレーション、とくにストレートナレーションと呼ばれる分野では、落ち着いたトーンで内容を伝える、という声のコントロールが必要とされ、クラスで使用する教材としては不都合なく、また、研究準備中に学習者の多くに聞かせてみたところ、やってみたい、こんなにきれいに話したい、という意見を多く聞くことができた。

ナレーションは「テレビ番組やCM、企業のVP (Video Package) と呼ばれるプロモーションビデオなどの映像につけられた音声表現」で、出来上がった映像に説明を加えたり、注意をひきつけたりすることで、番組を盛り上げる音声である。バラエティや情報番組はもちろん、ドキュメント、報道、スポーツなど、今はほとんどの番組にナレーションがついている。

同じように原稿を読むことが仕事であるアナウンサーはよい声で、正しい滑舌で情報を正確に伝えることが使命だが、ナレーターに求められるのは、時代を反映した語り方で番組に喜怒哀楽を増幅させたり、番組に説得力をもたせたりすることである。そのため声の良し悪しや正確な滑舌はアナウンサーほど厳格ではなく、表現力やセンスが求められる。

以上のことから、日本語教育のクラスで行うことができるプロジェクトワークとして、ナレーションに着目した。

4-3. 本研究・プロジェクトにおけるナレーションへの取り組み

本研究では、研究協力者としてナレータースクールで学び、ナレーションの仕事もしている大塚明子の協力を得て、ワークショップ等を企画している。また、今年の6月24日には、NHKの朝の連続テレビ小説の副音声ナレーションはじめ、NHK番組でナレーターとして活躍している松田佑貴氏を講師として迎え、本研究グループメンバー、および院生、声に関する演技の勉強などをしてきた卒業生等で、声のコントロール、ナレーションのワークショップをおこなった。その後も、松田氏には、ナレーション関係のご指導をいただいている。

5. 日本語教育への応用

以上のような事柄を踏まえ、学習者自身が音声表現能力の向上に取り組める活動として、プロの声優やナレーターが、活動広報のために作成する「ボイスサンプル」を教材として取り入れることを提案する。一つの作品が2分ほどと短く、例えば学術的解説、CM、番組の進行などさまざまな場面を想定した原稿を読み上げる「ボイスサンプル」は、音声表現力の獲得にとって有用な素材となる。また学習者が取材して原稿を作成するというプロジェクトベースの活動であるアクティブラーニングとして位置づけることもできる。

このように有益な材料であると考えられる「ボイスサンプル」が外国語教育に応用された例はまだ報告されていない。そこで、これまで研究してきた、王(2014a, 2014b, 2015a, 2015b, 2016b)などに述べられた日本語学習者の音声上の問題点である特殊拍、ポーズ、イントネーションなどから発展させ、表現力全般にかかわる速さ、強さ、ポーズといったプロミネンスに関わるパラ言語情報に

ついて学習者が効率的に習得できる指導法として、「ボイスサンプル」を活用したプロジェクトベースの実践を提案する。

音声そのものの訓練だけでなく、以下のような手順が日本語教育のプロジェクトワークとして位置づけられると考えられるからである。

- a. 原稿の選定（何本も番組、CM 等を見て、聞く）
- b. 原稿の作成（決定した内容を何度も聞き、文に起こす）
- c. 原稿のチェックを受ける（教師が修正する）
- d. ボイスサンプルとしての構成を考える（種類の異なる表現を選択する）
- e. 読みの練習をする（教師が特殊拍、アクセント、および表現を指導）
- f. 録音する
- g. 録音を聞く
- h. 作品にまとめ、発表する

以上が基本的な手順であるが、学習者のレベルによっては、省略、あるいは追加できる作業も考えられる。例えば、ごく初級であれば、原稿は教師が用意してもよいし、録音したあと、音楽をつける、あるいはスライドショーや動画をつけるということも可能である。いずれにしても、言語の四技能を活用する教室活動、学習者の自律学習が期待できる。

6. 教師研修の実施

これまでまとめたように、日本語教育に、ナレーションの「ボイスサンプル」を応用し、学習者へのプロジェクトワークとすることが音声表現の指導上、有益であると提案したが、最初の問題点に戻ると、それをどのように指導すればよいか戸惑う教師が少なからずいるであろうということが考えられる。

そこで、このボイスサンプルの研究プロジェクトでは、以下のような内容を含めたワークショップを基本とした教師研修を実施することも計画している。

ボイスサンプルについて

- ・ボイスサンプルの説明
- ・ボイスサンプルの試聴、配布
- ・具体的な録音方法

日本語教育における音声・音韻上の問題点について

- ・特殊拍
- ・母音の無声化
- ・アクセント
- ・イントネーション
- ・ポーズ
- ・声の強さ、発話の速さ 等

こうした音声上の問題点だけでなく、原稿の作成と、発声や表情、そして実際の録音について情報を共有できるワークショップを、教師研修として行うことを予定している。

7. おわりに

ボイスサンプルは、もともとナレーション等を職業としているプロが用いる材料ではあるが、それを日本語教育に応用するため、日本語教師としての目で観察し、その指導法を開発するのが本研究の目的である。すでに筆者の大学で行っている授業で使用した状況では、学習者から、楽しい、この話し方ができると気分が良いなど、肯定的に取り組む様子が多くみられ、学習者の音声に対する取り組みの動機づけが高くなるということも期待できると考えられる。

また、学習者の作成したボイスサンプルについて、評価のループリックのたたき台も作成し、提案することを目指している。今後、本指導法のワークショップをできるだけ多く行い、それぞれの教育現場での立場から、日本語教師の意見の聴取も行いたいと計画している。

参考文献

- 王 伸子 (2014a) 「日本語の音読における文末の韻律的特徴の分析と中国語母語話者の日本語習得」『日本語教育と日本研究における双方向性アプローチの実践と可能性 第9回国際日本語教育・日本研究シンポジウム大会論文集』 pp.343-352 ココ出版
- (2014b) 「文頭の語にフォーカスを置きたい場合の学習者の発音とその評価」『ヨーロッパ日本語教育第17回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム論集』 pp.67-72 ヨーロッパ日本語教師会
- (2015a) 「上級日本語学習者の文章読み上げにおけるポーズの実現について」『CAJLE2015, Proceedings 教師の役割・授業の再考—多様化する日本語学習者を背景に—』 pp.350-357 CAJLE
- (2015b) 「日本語の促音は一定か? - 音響的観察と学習者の習得改善 -」『Princeton University The 22nd Princeton Japanese Pedagogy Forum Proceedings 社会・コミュニティ参加をめざす日本語教育 2015』 pp.214-223 Princeton University
- (2016a) 「言語教育モデル CBI、CLIL の枠組みと大学における日本語教育—音声教育につなげるため—」『専修国文』100号 pp.1-13 専修大学日本語日本文学文化学会